

Toyota Municipal Museum of Art Press Release

豊田市美術館 プレスリリース

2022.12.19



Toyota
Municipal
Museum
of Art

豊田市美術館



佐々木健《ねこ》2017年 油彩、カンヴァス Courtesy of the artist and Gomike

ねこのほそ道

Cat's Narrow Road

2023年2月25日[土]—5月21日[日]

開館時間：10:00-17:30（入場は17:00まで）

休館日：月曜日〔5月1日は開館〕

主催：豊田市美術館

協力：青山目黒、KAYOKOYUKI、小山登美夫ギャラリー、SUNAKI, Inc、TAKE NINAGAWA、中山英之建築設計事務所

協賛：GEMINI Laboratory by TOPPAN

観覧料：一般1,000円〔800円〕／高校・大学生800円〔600円〕／中学生以下無料

*〔 〕内は前売券及び20名以上の団体料金

*前売券：豊田市美術館（1月29日まで）、T-FACE B館2階インフォメーション（2月24日まで）

※T-FACE…時短日：2022年12月31日〔土〕10:00-18:00 休業日：2023年1月1日〔日〕、2月21日〔火〕

*障がい者手帳をお持ちの方（介添者1名）、豊田市内在住又は在学の高校生及び豊田市内在住の75歳以上は無料（要証明）。

*その他、観覧料の減免対象者及び割引等については当館ウェブサイトをご確認ください。

*感染症拡大防止のため会期、来館者の受入態勢等を変更する場合があります。当館ウェブサイトから最新情報をご確認ください。

同時開催：愛知県美術館・豊田市美術館同時開催コレクション展 ^{とくとみみつる} 徳富満一テーブルの上の宇宙

開催趣旨

決して飼いならされることなく、野生を保ったまま人間とともに暮らすねこ。なにかの役に立っているわけではないのに飼い主の情緒に豊かに訴える、そんな普通で変な生きもの。群れをつくらずひとりで狩りをする肉食獣の彼らは、独立心が旺盛で優雅な、家のなかの小さな虎です。

これまで人間は多くの種に影響を及ぼし、世界中の動物を絶滅へと追いやってきましたが、ねこは長い時間をかけて人間と暮らすようになりました。そして人間が自然を離れて都市を形成し高層ビルに住むようになると、ねこも一緒に空に上がってきました。ねこは長い進化の過程で、自ら見て、触れ、嗅いで、隙間や内と外を自在に行き来しながら、あるがままの道を歩んできました。

本展では、人間とは異なる空間感覚や倫理観を持ち、言葉の秩序から逃れる逸脱可能な存在として、自由、野生、ユーモア、ナンセンス溢れる、どこか“ねこ”のような現代美術を紹介します。

出展作家

泉太郎(いずみたろう)、大田黒衣美(おおたぐろえみ)、落合多武(おちあいたむ)、岸本清子(きしもとさやこ)、佐々木健(ささきけん)、五月女哲平(さうとめてっぺい)、中山英之(なかやまひでゆき)＋砂山太一(すなやまたいち)

展覧会のみどころ

◎現代美術を通してみた“猫的なもの”の展覧会

昨今、猫は絵画・浮世絵の展覧会やインターネット上で人気を集め、“猫ブーム”到来ともいわれています。そして現代美術を通して猫を眺めると、かわいさだけではなく、日常性、くつろぎ、野生、ユーモアといった猫の特性とともに、ポエジーや異なる空間感覚、それに進化の時間などの多角的な面がみえてきます。本展では“猫的なもの”を媒介に、6人の美術家と一組の建築家の視点を通して、私たちの身近なところから人間中心の視点をずらしてみる試みを行います。

① 日常

ひしだしゅんそう たけうち せいほう ふじたつぐはる

猫はこれまで菱田春草、竹内栖鳳、藤田嗣治などの多くの画家に描かれてきました。かわいらしさと同時に野性味を併せ持つ猫は、画家たちの格好の題材でした。佐々木健は、背景のない肖像画のような構図で油絵の具による写実的な猫を描いていますが、同じ手法で雑巾やテーブルクロス、ブルーシートなどの、通常目に留められることのないものたちも細密に描いています。佐々木の絵画は、近代日本の油絵が構築しようとしてきた「大きな主題」を解体し、日常のささやかなものへとまなざしを向け直します。

展覧会のみどころ

② くつろぎ

猫の優雅な無気力さと無関心な休息ぶりは、見る人を和ませます。大田黒衣美は、人がリラックスするときに噛むガムを素材に公園で憩う人々の姿をかたどり、アトリエにふらりと立ち寄った猫のうえに置いて写真を撮ります。そのとき、広がる猫の毛並みは平原になり、見立てのような独特のおかしみをもった風景が現れます。

③ 野生

完全に飼いならされることがない猫は、時折人間の管理欲望を乱します。岸本清子にとって、猫は愛と自由の象徴であり、「赤猫革命」と称して社会変革を訴えるパフォーマンスを行いました。岸本の絵画やパフォーマンスは、私たちの日常におけるラディカルな攪乱要因となるのです。

④ ユーモア

いまだ野性を失わない猫は、人間とともに暮らすようになると、紐や球を追いかけたり、驚いて身長の数倍高く飛び上がったりと、数多くの愉快的な習性を見せます。泉太郎は、動物の異質性を作品に取り込んで、人間の知覚とは異なる不条理なユーモアを生み出します。

⑤ ポエジー

犬のように人間の指令に従うことなく、自分で触れ、嗅ぎ、見ることに頼る猫は、言葉に支配されません。気ままに生きる猫は、しばしば非論理的な存在として多くの詩に登場してきました。落合多武の作品に登場する猫たちは、自由な連想遊びのような豊かな余白を孕んで、独特のポエジーを生み出します。

⑥ ミクロとマクロ

猫の視点を介せば、本棚は山に、絨毯は大海原になります。中山英之+砂山太一は、各部屋が岩でできた住宅模型や、紙でできた石の家具「かみのいし」を展示して、美術館の空間の変容をもたらします。

⑦ 積層する時間

猫には、人と暮らすようになるまでの進化の長い道のりがあります。絵画の歴史の先であくまで自らの体験に根差して制作された五月女哲平の絵画やオブジェは、表面から見えない塗り重ねた色層が積み重ねられた時間を感じさせ、展示空間をささやかに変えます。

作家略歴

泉太郎 (IZUMI Taro, 1976年生まれ。東京拠点。)

泉太郎は、映像、オブジェ、パフォーマンスを織り交ぜたインスタレーションにおいて、しばしばゲームのような手法を用い、身体の不自由と無意味の自由の狭間に不条理なユーモアを生み出す。泉の作品にはしばしば動物が現れるが、その異質性を通して人間の慣習からはずれた回路を開き、私たちの知覚を愉快地宙吊りにする。

主な展覧会：個展「Sit Down. Sit Down Please, Sphinx」東京オペラシティ アートギャラリー（東京）2023年、個展「ex」ティンゲリー美術館（バーゼル）2020年、個展「Pan」パレ・ド・トーキョー（パリ）2017年、個展「こねる」神奈川県民ホールギャラリー（神奈川）2010年

大田黒衣美 (OTAGURO Emi, 1980年生まれ。愛知拠点。)

大田黒衣美は、ウズラの卵の殻、ガム、猫の毛並みなど自在な素材を用いて、絵画とオブジェ、そして写真の中間領域にあるような作品を制作する。見立てに似た手法により、擬態の役割を果たすウズラの卵模様は風景になり、気分転換のために噛むガムは公園で休憩する人々になり、猫の毛皮は野原になって、日常の隙間に飄々とした光景を生み出す。

主な展覧会：個展「the reverie」KAYOKOYUKI（東京）2022年、個展「Mesa」クンストラハウス・ベタニエン（ベルリン）2020年、個展「project N 55 大田黒衣美」東京オペラシティアートギャラリー（東京）2014年

落合多武 (OCHIAI Tam, 1967年生まれ。ニューヨーク拠点。)

落合多武は、ドローイング、絵画、オブジェ、彫刻、パフォーマンスの多様な媒体で制作を行うが、そのすべてに自身が行う詩作のような軽快なポエジーが漂う。過去の記憶や体験を自由な連想遊びのように繋いだドローイングは、容易に意味を成さない豊かな余白を生む。作品には、しばしば意味を逃れる気まぐれな脱領域的存在そのもののような猫が登場する。

主な展覧会：個展「輝板膜タペータム」銀座メゾンエルメスLe Forum（東京）2022年、個展「旅行程、ノン？」小山登美夫ギャラリー（東京）2019年、個展「スパイと失敗とその登場について」ワタリウム美術館（東京）2010年

岸本清子 (KISHIMOTO Sayako, 1939年生まれ。東京、愛知拠点。1988年没)

岸本清子は、ネオ・ダダイズム・オルガナイザーズ（ネオダダ）のメンバーとして、1960年代に前衛芸術シーンで活躍した。1979年に名古屋に帰郷した後は、近代文明批判としての絵巻物や歴史的人物の肖像画などの絵画制作や愛による社会変革を呼びかけるラディカルなパフォーマンスやライブ演奏を行った。岸本の作品に描かれる猫は、愛と自由の象徴である。

主な展覧会：「岸本清子遺作展」名古屋電気文化会館（愛知）1990年、個展「創世記の崩壊—そして、海」ボックス・ギャラリー（名古屋）1980年、個展「I am 空飛ぶ赤猫だあ！」ギャラリー79（名古屋）1981年、個展「最後の晩餐」明治画廊（東京）1977年

作家略歴

佐々木健 (SASAKI Ken、1976年生まれ。東京拠点。)

佐々木健は、テニスボール、雑巾、テーブルクロス、音響器具など、絵画の主題になりそうもない身近な物を油絵具で写実的に描く画家である。それは、写実より表現を追究した近代の現実を凌駕するロマンチズムへの批判であり、すべてのものを等価に眼差すという態度である。その絵画は、障害のある兄を介して社会とケア、社会と芸術および芸術家の問題を扱う最近の活動にも通底している。

主な展覧会：「合流点」五味家・The Kamakura Project／企画：佐々木健、五味家（神奈川）2021年、「佐々木健：仮設オープンスタジオ 4,5,11,12 May 2019」（青山目黒）2019年、「不純物と免疫」トーキョーアーツアンドスペース本郷（東京）／BARRAK 1（沖縄）2017－18年

五月女哲平 (SOUTOME Teppei、1980年生まれ。東京、栃木拠点。)

五月女哲平は、対象を幾何学的な色面に変換する絵画で注目されたが、近年では無彩色の黒やグレー、白の色面が画面を覆い、地と図が幾何学形象を成す、よりミニマルな絵画を制作している。一見シンプルに見える絵画の下に何層にも塗り重ねられた色彩があり、図の縁に色の微かな揺れが生じる。五月女の作品は純粹絵画を志向しているようで、その対象は常に自身の身近なところから選ばれている。

主な展覧会：「our time 私たちの時間」青山目黒、NADiff a/p/a/r/t, void+（東京）2019年、「絵と、」αM（東京）2018年、「絵画の在りか」東京オペラシティ アートギャラリー（東京）2014年、「リアル・ジャパネスク」国立国際美術館（大阪）2012年

中山英之 (NAKAYAMA Hideyuki、1972年生まれ。東京拠点。) + 砂山太一 (SUNAYAMA Taichi、1980年生まれ。東京、京都拠点。)

建築家である中山英之は、大・小、内・外を反転あるいは入れ子状にして、それまで重視されていなかった空間も巧みに活かす建築家である。砂山太一は、建築をはじめ美術を含めた芸術領域全般で、制作・設計・企画・批評を手掛けている。二人の建築家が共同で手掛けた「かみのいし」は、文字通り紙でできた石そのものに見える家具であり、生活のなかに異質なユーモアを生み出す。

主な展覧会・作品：中山英之+砂山太一「紙のかたち展2 ふわふわ、ごろごろ、じわじわ」竹尾 見本帖本店（東京）2017年

中山英之／設計「石の島の石」瀬戸内国際芸術祭、「中山英之展 and then」ギャラリー間（東京）2019年 砂山太一／「第17回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展」日本館（ヴェネツィア、イタリア）2021年

カタログ

出版：torch press

刊行予定日：2023年4月

価格：未定

*発行日等の詳細は、美術館ウェブサイトでお知らせします。

関連イベント

参加作家によるトーク

日時：2月25日(土) 14:00-15:30

会場：豊田市美術館 講堂

参加方法：未定

*その他イベントの詳細については、美術館ウェブサイトにてお知らせします。

同時開催企画

愛知県美術館・豊田市美術館同時開催コレクション展 徳富満一テーブルの上の宇宙

愛知県名古屋市に生まれた徳富満(1966-2001)は、知覚と認識のあいだのちょっとしたズレや、物のかたちと同一性をめぐる思索を、鮮やかな手付きで作品として提示するアーティストです。愛知県美術館と豊田市美術館では、両館が所蔵する全作品を通じて、短い期間にも関わらず多彩な作品を生み出したアーティスト徳富満の全貌をご紹介します。

期間：2023年2月25日(土)-5月21日(日)

休館日：月曜日[5月1日は開館]

主催：豊田市美術館

会場：豊田市美術館 展示室3

観覧料：一般300円[250円]／高校・大学生200円[150円]／中学生以下無料

*[]内は20名以上の団体料金

お問合せ

豊田市美術館

〒471-0034 愛知県豊田市小坂本町8丁目5番地1

<https://www.museum.toyota.aichi.jp> e-mail: bijutsukan@city.toyota.aichi.jp

展示内容に関するお問合せ 学芸担当：能勢、千葉 Tel. 0565-34-3131

掲載依頼・取材等に関すること 庶務担当：吉兼、籠谷^{よしかね こもりや} Tel. 0565-34-6748

「ねこのほそ道」 広報用画像について

当館ウェブサイト「[広報用画像ダウンロード](#)」[申し込みフォーム](#)より、ご希望の画像を申請してください。
「広報用画像ダウンロード」の画像提供サービスは、パソコンでのみダウンロード可能となります。
パソコンからのお申し込みが難しい方は、以下を記入のうえ、Faxでお送りください。



Toyota
Municipal
Museum
of Art

豊田市美術館

送り先：豊田市美術館 庶務担当 吉兼（よしかね）、籠谷（こもりや）
Tel 0565-34-6748 Fax 0565-36-5103
e-mail: bijutsukan1@city.toyota.aichi.jp

お名前	様	ご所属
Tel		Fax
e-mail		必要な画像等の番号
掲載紙／メディア名		発売、放送予定日 月 日（ 月号、vol. ）
必要な観覧券枚数（最大5組10名分）	枚	観覧券の送付先

*読者プレゼントのため等、希望する場合のみご記入ください



1



2



3



4



5



6



7

1. 佐々木健《ねこ》2017年 油彩、カンヴァス 個人蔵 Courtesy of the artist and Gomike
2. 岸本清子《I am 空飛ぶ赤猫だあ!》1981年 ラッカー、パステル、カンヴァス 宮城県美術館蔵
3. 落合多武《猫彫刻》2007年 ポリウレタンプラスチック、キーボード 個人蔵 ©Tam Ochiai
4. 泉太郎《ねこ》2005年 映像 ©Taro Izumi
5. 大田黒衣美《旅する猫笛小僧》2013年 ウズラの卵、ワックスペーパー、布、包装紙 個人蔵
6. 五月女哲平《our time》2020年 アクリル、木 / 《You and I》2019年 アクリル、木 ©Teppei Sotome
7. 中山英之+砂山太一《かみのいし》2020年 紙、木 ©中山英之建築設計事務所

資料の使用には以下の点にご注意ください。

- ・作品写真のトリミング、文字のせはご遠慮ください。
- ・ご紹介いただく場合は、情報確認のためゲラ刷り等をお送りください。

美術館使用欄 画像提供の依頼日 年 月 日 ☐画像送付 ☐校正 ☐修正 ☐配信・配本